

チャールズ・ディケンズ作 『クリスマスツリー』

西 條 隆 雄 訳

序

「クリスマスツリー」は、1850年序チャールズ・ディケンズ (1812-1870) が自ら編集する雑誌 *Household Words* のクリスマス号 (December 21, 1850) に載せた記事である。記事とは言え、この短編は彼が幼少年時代に読みかつ打ち興じた様々な文芸土壌を語ると同時に、彼の想像世界の根幹となっているものをも伝えて、文学的香りの高い小品となっている。そこには、童話、アラビアンナイト、チャップブック、パントマイム、人形劇、メロドラマ、そして怪奇談が多彩に並んでおり、彼の想像力の不思議な魅力の源泉がかいま見える。民話、神話、伝説、実話が幅広く交錯する空想世界こそは彼の文学土壌であって、彼はこうした世界をいつまでも失うことなく持ち続けようと純粋に願う。いわゆる子どもの純粋世界、空想世界を大人になっても持ち続ける大切さを訴える記事である。

恐らく、パントマイムとかメロドラマへの言及が容易に把握できなかったからであろうか。この記事はよく引き合いに出されながら翻訳されることはなかった。ここでは、そうしたところを注釈で補いながら、邦訳を試みた。

クリスマスツリー

私は今夜、あのきれいなドイツの玩具、クリスマスツリー¹のまわりに集う、うれしそうな子供たちを眺めている。ツリーは大きな丸テーブルの中央

に植えられ、子供達の頭上に高くそびえ立っていた。たくさんの小ローソクが眩いばかりに点され、きらきらした飾りがいたるところに輝いていた。緑葉の下にはバラ色の頬をした人形が隠れ、数え切れないほどたくさんの小枝には、本物の腕時計（少なくとも針は動き、ネジはいくらでも巻けるもの）が吊り下がっている。大枝にはフランス風仕上げのテーブル、椅子、ベッド、箆司、八日巻時計、その他いろいろな室内調度品（ウォルヴァーハンプトン製の見事な錫製品）が飾りつけられ、まるでこれからはじまる妖精の家庭生活の準備をしている風であった。愉快的幅広顔の小人たちがいた。それは本物の人間より、一見はるかに感じがよかった——それもそのはず、頭を取りはずすと砂糖菓子が詰っていたのだから。ギターと太鼓、また、タンバリン、本、裁縫箱、絵具箱、砂糖菓子の箱、覗き箱、それにありとあらゆる箱があった。乙女用の装身具、これは大人のつける金銀宝石よりはるかによく光っていた。あらゆる意匠の手籠と針山。大砲、刀、旗印。数人の魔女が、厚紙製の魔法の輪の中に立ち、運命を占っている。四角ごま、鳴りごま、針入れ、ペンふき、気付けびん、問答遊びカード、花束受け、本物の果物に金箔をはり、きらきら光らせたもの。あっと驚かせるものを詰めた紛いのリンゴ、なし、栗。つまるところ、私の前にいる可愛い子供が、大の仲良しであるお隣のかわいい子供に、「なにもかもあるわ、それにもっとよ」とうれしそうにささやいたとおりであった。この、よせ集めの風変りな物また物が、まるで魔法の果物のようにツリーに鈴なりになり、四方八方から眺める輝く顔を照り返している様——それに見とれるダイヤモンドの目は、テーブルの高さに届かないものもあり、ごく少数はおずおずと目を見張り、美しい母親、叔母、乳母の胸に抱かれて、物ほしように眺めている——そのような様子が子供時代のいろんな空想を生き生きと蘇らせるのであった。そして、地上に生える木という木、大地に生まれおちるすべてのものが、忘れもしないこの時節に、どうして狂ったように己れを飾りたてるのだろう、と考えずにはいられなかった。

いま、ふたたび家にあって一人きりになり、起きているのは私一人になると、私の想いは抵抗しようとも思わぬ、うっとりした気持ちに誘われて、子供時代に連れ戻されてゆく。幼い頃クリスマスの日に飾ったツリー、そのツリーの枝を伝い降りて私たちは実人生にたどりつくのであるが、その枝には何が吊るしてあったのを一番よく憶えているであろうか、と考えはじめる。

部屋の真中に、まわりの壁やすぐに届く天井に遮られることもなく、黒々としたツリーがそびえ立つ。目を上げて、頂の夢かと思紛うきらめきを見据えると——このツリーは大地に向かって逆さに伸びる不思議な性質を有しているかに思われるのであるが——私はもの心ついてはじめてのクリスマスの想い出を見据えているのである。

おもちゃというおもちゃが、まず目に入る。はるか上方には、柵の緑葉と赤い実の間に、両手をポケットに入れた起き上がりこぼしがいる。こいつはどうあっても倒れず、床に置くとたびに太い体を前後左右にゆさぶりつづけ、ゆさぶりがおさまるやいなや、車海老の目が飛び出して私を睨みつける。こんな時、私は表面でこそおおいに笑ってみせるが、心の奥底ではこいつを極度に怪しいと思う。すぐ隣には、あのいまましいかぎ煙草入れがある。その中から黒いガウンをまとい、むかつく頭髪をし、赤布の口を大きく開けた、悪魔のような説教師が飛び出してくる。こいつはどうあっても我慢ならないが、追い払うこともまたできないのである。それというのも、こいつ思いもよらない時にたびたび夢の中にあられ、とても大きな身体をして「マンモスのごとく大きなかぎ煙草入れ」の中から突然飛び出してくるからである。はるか向こうの、尻尾に靴糸用のロウをつけた蛙もまた同様である。というのも、これが何処に飛び跳ねてこないかは知りようがないからである。ロウソクを飛び越し、あの斑点だらけ——緑の地に赤の斑点——の背をして、手に飛び乗ってくるかと思うと、ぞっとする。同じ枝の、青絹のスカートをはいた厚紙製の女性は、踊るために燭台に立てかけられているが、この女性は先ほどの輩に比べれば穏やかで、また美しかった。だが一段と大きな厚紙製

の男はそうはいかない。この男はたいてい壁に吊るされ、糸で引っ張られていたからである。あの鼻には不気味な表情があった。彼が両脚を首のあたりに上げた時には（彼は頻繁にそうしたが）、それこそ寒気がし、さし向かいでいられる相手ではなかった。

あの恐い仮面がはじめて私を見つめたのはいつだったか。誰がそれを被っていたのか。なぜ私はそれほど怯え、これが生涯の重大事件となっているのか。もともとけっしてぎよっとする顔つきではない。ひょうきんに作られてすらいる。でも、なぜこの無表情な顔にそれほど我慢ならなかったのか。仮面が被った人の顔を隠したからではない。顔を隠すならエプロンでもできたはずである。そのエプロンですら、取り除きたかったのではあるが、エプロンなら仮面ほどに我慢ならぬものでもなかったろう。仮面の表情が変わらぬせいだったろうか。表情が変わらぬといえば、人形の顔も同じだが、「その女」は恐くはなかった。おそらく、実際の顔にやがて忍び寄ってくる、あの固定し動かぬ変化が、万人の顔に訪れそれを不動のものとする、あのなべてに訪れる変化を私の高鳴る胸にそれとなく伝え、恐がらせたのだ。私は何としてもそれとうちとけることはできなかった。ハンドルを回すと物悲しい声をだす鼓手たちであろうと、箱から取り出し、兵士を一人ずつ、かたくてなかなか開かぬ小型の伸縮ヤットコの上に整列させた、だんまり楽隊付きの連隊であろうと、針金と褐色紙で作った、二人の子供にパイを切っている老女であろうと、いづれも長い間私に永遠の慰めを与えることはできなかった。仮面を見せてもらい、それがただの紙切れでできていることがわかって、また、それがしまわれ、誰一人それを被ってはいないと言われても、それで納得することはできなかった。あの固定した顔を思い出すだけで、また、それがどこかにあると知っているだけで、夜中、汗びっしょりになり、恐怖に怯えて目をさまし、こう叫ぶのであった。「わあっ、出てくる！ わあっ、仮面だ！」

荷籠をつんだ、あのなつかしい口バ——そら、そこにいる！——が、何で作られていたのか、そのときは考えてもみなかった。皮は、触れて本物だっ

たのを憶えている。また、体じゅう赤い丸斑点だらけの大きな黒馬——私が跨ることすらできた馬——が、なぜこのような奇妙な体になったのかは考えてもみなかったし、そのような馬がニューマーケットでは普通には見られないことなど、思いもよらなかった。黒馬に並んで色のはげ落ちた馬が四頭、チーズを積んだ荷馬車につながれていた。取り外してピアノの下の厩にしまうこともできたが、その馬はどうやら、尻尾には皮ケープの端切れを、たてがみには別の端切れをつけ、脚がわりには木杭を打ちつけて立っているようだ。しかし、クリスマスの贈り物として家に持ち帰ってきた時には、そうではなかった。その時は万事申し分なかった。いまではそうだが、拍車だって胴体に無造作に釘づけされていたのではなかった。オルゴール車の音色仕掛は、私がこの目で見つけ出したのであるが、羽軸製の楊子と針金でできていた。また、あのシャツ姿の小さな起き上がりこぼしときては、かならず木枠の一方をよじ登り反対側を逆さに下りてゆくので、人はいいとして頭はやや弱いなど常々考えた。だが、隣のヤコブの梯子は、小さな正方形の赤杉を組み合わせてできていて、それが一段ずつ翻り、カタカタと音を立てながら上に登ってゆき、一段ごとにちがった絵を繰り広げてゆく。しかも全体には小さな鈴がついていて、華やいている。これはすばらしい逸品で、私の大好きなものであった。

あ、人形の家！——これは私の所持品ではなく、見に出かけたのである。本物のガラス窓と玄関石段、それに本物のバルコニーのある、あの正面石造りの邸宅に比べれば、国会議事堂といえどその半分ほども賞賛する気にはなれない。その邸宅は、海水浴場を別とすれば、いま私がどこで目にするものよりもみずみずしい緑色をしており、その海水浴場といえどもおそまつな二番煎じを提供できるにすぎない。その邸宅は、正面全体が確かに一斉に開くには開いたが（階段をつけるのを省いているので、ショックであったことは認める）、再び閉ざしてしまわねばならなかった。その理由はじゅうぶんわかる。開いたときでも部屋はまぎれもなく三つあった。優雅に家具調度を備

えた居間と寝室、それにどこよりもすてきな台所。台所には、すぐ曲がる炉辺鉄具や、種々様々な超小型台所用具が揃っている——あ、足温器！——それに横向き姿の錫製コック、この人はいつも魚を二匹揚げている。木製大皿のセットが、ハムとか七面鳥といった特有の御馳走をしっかりと糊づけし、苔だと記憶しているのだが、何か緑色の物を添えて出てくる。この貴人の饗宴にたいして、それがバルマク家の饗宴²であるとはいえ、いかに公正に私はそのすばらしさを認めたことであろう！ 当節の禁酒協会という協会をすべて合わせても、向こうにある揃いの小さな青磁の茶器で私が飲んだお茶の味を堪能させてくれるであろうか。青磁の茶器には本物の液体が入り（小さな木樽から流れ出て、マッチの味がしたのを憶えている）、お茶をまろやかなお酒に変えてしまうのであった。また、小さな角砂糖バサミが砂糖をつかめず両端が互いのけぞって、パンチ人形の手のごとく用途を欠くとしても、それがどうだというのであろう。また実際にあったことだが、私が一度うかつにも舌の焼けるほど熱いお茶に小匙を溶かしこんでしまい、これを飲んでしまったゆえに、毒を飲まれた子供のように大声でわめき出し、居合わせた貴顕淑女をびっくり仰天させたとしても、それで私の身体に異常があったというのではなかった。ただし、紛薬を飲んだのであれば、そうはゆかなかったであろう。

ツリーのもっと下の大枝にやってくると、緑色のローラーとおもちゃの庭道具にすぐ並んで、本が何とぎっしり吊り下がりはじめていることであろう。はじめはそれ自体薄手の本であるが、それがたくさん、しかも朱や緑のうっとりするほど滑らかな表紙をつけている。何はさておき、何たる太い黒文字であろう！「Aはアーチャー [射手]、蛙を射た³」もちろんAはアーチャー。Aはアップルパイでもあって、そらこの本ではアップルパイになっている。Aは生存中、いろんなものになる³が、その友人である他のアルファベットもまた同じである。でもXは例外、彼には融通性というものがほとんどなく、私もクセルクセスかクサンティッペ以外は知らない。同じくYとZ。Yは必

ずといってヨットか、ユウ [いちい] に限られ、Zは永久にゼブラ [縞馬] か、ザニー [道化師] の独房入りである。しかし、今やツリーそのものが姿をかえ、豆の木——ジャックが伝い登って巨人の家にたどりつく、あの魔法の豆の木となる。今や、あのぞくぞくするほど面白い双頭の巨人たちが肩に棍棒をかつぎ、髪をつかんで夕食用に騎士や淑女を引きずりながら、群れをなして枝々を大股に渡りはじめる。そしてジャック——鋭い太刀を佩き神速の靴を履いて、何と立派なこと！ 彼を見つめていると、再びむかしの想いが私を襲ってくる。そして私は心のなかで次のように論争するのだ。記録に残る数々の偉業をすべて成し遂げたジャックは、はたして一人以上いたのか（こんな可能性は信じたくない）、それとも真正正銘、あの天晴れなジャックただ一人であったのかと。⁴

クリスマスの時節にふさわしいのは、赤色の外套。赤ずきんがこれを着て——ツリーは、いまや、彼女が籠をさげて旅ゆく森にかわる——あるクリスマスの前夜、おばあさんに扮したあの狼の残忍さと裏切りを私に告げにやってくる。狼はおばあさんを食べてまだもの足りず、自分の歯に関してあんな残忍な冗談を飛ばしたあと、つづいて赤ずきんを食べてしまったのである。彼女は私の初恋の人だった。もし赤ずきんと結婚していれば、無上のよろこびを味わっていたらうにと思った。だがそれは果たせぬ夢であった。そこでノアの箱舟の中にその狼を探し出し、卑しむべき極悪獣として、机上の行列の後方にそれを置くよりほかにしかたがなかった。あゝあの見事なノアの箱舟！ 盥に入れてみると、航海にはとても耐えられぬことがわかったし、動物たちは屋根のところに寿司詰めにしなればならなかった。だが、そこですら、入れる前に両脚をしっかりと振ってまっすぐ垂らしておく必要があった。それでも、ドアは針金を掛けて締めただけのいい加減なものであったので、十中八九ドアから転げ出てくるのであった。しかし、箱舟にくっ付いているのは一体何であろう。見てごらんなさい。象より一まわりか二まわり小さいだけの立派な蠅を。それにテントウムシ、蝶——すべて技術の粋をつく

したものだ。鷺鳥を見てごらんなさい。足はとっても小さく、バランスなど意にも介していないので、たいてい前方に転げ、動物たちをみんななぎ倒してしまっている。ノアと家族を見てごらんなさい。まるでおかしなパイプの押え棒と変わりありません。それに、ヒョウは暖かくなった小指にくっ付いているし、それよりもっと大きな動物の尻尾は、たいてい徐々に形をくずし、解れた糸屑になってしまっている。

静かに！ 場面はふたたび森となり、誰か樹上にのぼっている——ロビンフッドではなく、ヴァレンタインでもなく、黄色の小人（私は彼のこと、マザーパンチの不思議のわざのすべてを語らずに通過した⁵）でもない。それはきらめく新月刀を佩き、ターバンを巻いた東方の王様である。おやおや！ 王様は二人いる。別の一人が肩ごしに眺めているのが見えるからだ。根元の草の上には、真っ黒な巨人が四肢を伸ばし、女の膝を枕に眠っている。すぐ脇には、四個のよく光る鋼鉄の錠を下したガラスの箱があり、目を覚ましている間は囚われの女をそこにしておくのである。彼のベルトに四個の錠が見える。女が樹上の二人の王様に合図を送ると、二人はそっと降りてくる。これはすばらしい『アラビアンナイト』の開巻の場面である。

あ、今やありきたりのものがすべて、私には類希なるものとなり、魅力を秘めたものとなる。ランプはすべて魔法のランプとなる。指輪はすべて霊験あらたかなるものとなる。ありきたりの植木鉢には宝物がぎっしり詰まり、その上に土が少しかけられている（「アラジンと魔法のランプの物語」Ⅲ）。樹々はアリババが身を隠すものであり（「アリババと四十人の盗賊の物語」Ⅳ）、厚肉は、ダイヤモンドの谷に投げ入れると宝石がこれにくっつき、鷺がさらって自分の巣に運んで行こうとするところを、商人たちが大声をあげて威すのである（「船乗りシンドバードの物語の第二話、そしてそれは第二の航海である」Ⅱ）。タルトがバスラの大臣の息子の調理法にのっとり作られる。この息子は、ダマスカスの城門のところにも肌着だけのあらわな姿で降ろされてからのち、料理人に転身したのである（「男のハサン・パドレディ

ンの物語」Ⅰ)。靴屋という靴屋はすべてムスタファ爺さんになり、目隠しをして連行され、四つに切断された人間の身体を縫合することが習慣となっている（「アリババと四十人の盗賊の物語」Ⅳ）。

板石に埋めこまれた鉄の環といえども洞窟に通じる入口となり、あの魔法使いと小さな焚火、そして魔法がやがて大地を振動させるのをひたすら待っているのである（「アラジンと魔法のランプの物語」Ⅲ）。輸入なつめやしはすべて、かの不運なるなつめやし——かの商人がその核を投げたところ、人間の目にはみえぬ魔人の息子の目にあたり、片目をえぐり出してしまった、あのなつめやしと同じ木からとれたものとなる（「商人と魔神との物語」Ⅰ）。オリーブの実という実は、今年の実をつけた親木から採れたものとなる。教主であるハールーン・アル・ラシードは、かの子供が裁判遊びで、七年前の実だと言いはる商人のペテンを暴いているのを立ち聞きし、オリーブ商人の詐欺を誤ることなく裁いたのであった。⁶ リンゴというリンゴは、かの子供が金貨三枚を払って（他の三つと共に）サルタンの園丁から買い求めたものの、のっぽの黒人奴隷に盗み取られてしまった、あのリンゴとなる（「斬られた若い女の物語」Ⅰ）。犬という犬は、実際は魔法をかけられて犬の姿となった人間で、パン屋のカウンターに飛び上がり、老婆の払った贖金に前足をのせたのであった（「白い牝馬の主人の若者の物語」Ⅳ）。米という米は、食人鬼が姿をかえたあの恐ろしい女性が、一粒ずつしか突つけなかった米を思い出させる。一粒ずつしか突つけないのは、夜な夜な墓場で死肉をあさり、お腹がいっぱいだからであった（「貧乏カーリーの物語」Ⅲ）。紛れもない私の木馬——そら、そこで鼻孔を完全にうらがえし、血だ！血を見せている——には首に栓があり、あのベルシャ王子が父の宮廷の人々の見ている前でやったと同じように、その栓をひねって私と共に大空へ飛び去ってゆくはずだ（「黒檀の馬奇談」Ⅱ）。

そう、私のクリスマスツリーの上方の枝にかかる一つ一つの飾り物に、この終夜灯！が見える。夜明け方、窓ガラスの霜ごしに白雪がかすんで見える、

そんな寒く暗い冬の朝ベッドで目をさますと、私にはディナザードの声が聞こえる。「お姉さん、まだお眠りにならないのでしたら、黒島の若き王様のお話（「魔法にかけられた若者と魚の物語」I）を話し終えてくださいませんか」シェハラザードは答える。「私のご主人であられる国王様が、さらに一日私の命を引き延ばしてくださいますなら、それを話し終えるばかりか、もっとすばらしいお話をいたしましょう」その時、寛大な国王は処刑の命令を出さずに退室してゆくので、私達三人はホッと胸をなでおろすのである。

私のツリーをこの高さまで下りてくると、枝葉のあいだに体を縮めた途方もない悪魔——七面鳥からか、プディングからか、それともミンスパイから生まれたか、あるいはいろいろな空想、孤島のロビンソー・クルーソーや、猿にとり囲まれたフィリップ・カールや、バーロー氏と過ごすサンドフォードとマートンや、⁷マザーパンチや、あの仮面とごっちゃになって生まれたか——あるいはまた、想像力や投薬過多に災いされて、消化不良になったせいなのか——が見えはじめる。形が非常に不鮮明なので、なぜこれが恐いのかはわからない——だが間違いなく恐いことはわかっている。私に見分けられることといえば、どこまでも並んだ形なきものが、昔おもちゃの兵隊を乗せていたあの無精鋏を非常に大きくしたようなものに乗せられて、ゆっくりと私の目に近づいてきては、遙か彼方に退いてゆくように思われるだけである。一番近くまできた時など、恐いところではない。それと関連して、信じがたいほど長い冬の夜な夜なが思い出される。些細なことを犯した罰として早く寝かされ、二時間後に、二晩も眠りつづけたような気がして目覚め、夜の明ける望みなどとうてい持ちえず、後悔の念におしつぶされた夜を。

そして今、一列にきれいに並んだ小灯が、大きな緑色のカーテンの前を、スーッと地上から上ってくるのが見える。今や鐘、魔法の鐘がなる。それはどんな鐘ともちがって、今なお私の耳に鳴り響く。続いてがやがやした人声と、香ぐわしいオレンジの皮とランプの油の臭う中で、音楽が奏でられる。ほどなく魔法の鐘が鳴り音楽が止むと、緑色のカーテンがおごそかに巻き上

がる。するとお芝居が始まる。モンタージスの忠犬がボンディーの森で闘ちされた主人の復讐をとげる。⁸そして赤鼻の、小さな帽子をかぶった愉快な「百姓」、いまこの瞬間から私はこの男をいつまでも友として胸に抱くが(この男、村の旅籠で給仕あるいは馬丁をしていたと思うが、この男と私が出会って以来もう何年もが過ぎてしまった)、この男、この犬の「察しが良さ(sassigassity)」には本当に感心します、と語る。この面白い奇語は、私の記憶の中でいつまでも新鮮で色あせず、思いつくどんな冗談にもまして、永久に生きつづけることであろう。あるいは今、かの哀れなジェイン・ショアが白衣に身を包み、褐色の髪を垂らし、何一つ口にすることもなく、通りを彷徨い歩いて行ったことを知り、悲しみの涙にくれるのである。あるいはまた、ジョージ・バーンウェルがこの世に二人といた立派な叔父を殺し、そのうち深く後悔し、自分は手を下さずにすめばよかったのに、と嘆いたことを。私を慰めにいち早くやってくるのは、パントマイム——これは途方もなくすばらしい世界である。道化が弾をこめた臼砲から打ち出され、まこときら星である大シャンデリアに飛び込む。ハーレキンが純金の鱗に体を包み、まるで世にも珍しい魚のように体をくねらせ、キラキラと光る。⁹パンタルーン(これを内心、祖父にたとえてもお門違いではあるまい)がポケットにまっ赤に焼けた火かき棒を何本か突っ込み、「おっ、誰かやって来るぞ!」と叫ぶ。あるいは道化のくだらぬ窃盗を責めて、「俺はな、てめえがやるのを見たんだぜ」と述べる。ところがその時何もかもが、いとも易々と別のものになり変わり、「や、消えてしまった。おつむがそう思わせるのよ」と空惚ける。今また私は、初めてやるせない気持ち——後年になると頻繁に繰り返すのであるが——に襲われる。翌日にはもうあの退屈な、きまりきった世界に戻っては行けない。たった今あとにした、あの輝かしい雰囲気のかなかでいつまでも暮していたい。神々しい床屋の看板棒ともいうべき杖を打振る小妖精にすっかり心を奪われ、妖精となって、彼女と共に永遠の命をもつ身になりたいと乞い願うのである。あゝ私の目がクリスマスツリーの枝々を彷徨うとき、

彼女はいろんな形をとって舞い戻りまた遠ざかって、一度たりと私のそばに留まってはくれないのだ！

パントマイムの歓びから人形劇舞台が飛び出してくる——そら、いつもの前舞台つきで、ボックス席には羽根飾りのご婦人たち、そして糊、にかわ、ゴム、水彩絵具を使って付随する準備をすべてととのえ、「粉屋と手下たち」「エリザベス、あるいはシベリアの流罪人」¹⁰を上演する。二、三の必ずつきまとう不慮の出来事や失敗（特に、あの立派なケルマーおよび幾人かが、芝居の高潮した場面で、脚が弱り身体が二つ折れになるという理不尽なる傾向）にもかかわらず、空想に満ちた世界はじつに示唆に富み包括的で、私のクリスマスツリーのずっと下に見える昼間の暗くうす汚い本物の劇場が、まるで一番珍しい花で作ったばかりの花綱で飾りつけられるかのように、こうした連想で飾られ、今なお私を魅了するのである。

しかし、耳を澄ませて！ 聖歌隊が音楽を奏でている。彼らは幼い私の眠りを破る。彼らがクリスマスツリーの上で音楽を奏ではじめると、私はクリスマスの音楽にどのような想いを馳せるであろうか。誰よりもよく知られた彼らが、他の人々をはるか後にして、私の小さなベッドのまわりに集まる。み使いが野の羊飼いの群れに語りかける。幾人かの旅人が目を上げ、星を追う。飼葉桶の赤ん坊。広い宮居の中でいかめしい人々と語る幼な子。穏やかな美しい顔の、おごそかな人物が、死んだ少女の手をとって立ち上がらせる。ふたたび、市の城門近くで棺架で運ばれてゆくやもめの息子をよみがえらせる。群衆が彼の座っている部屋の屋根に穴をあけて覗きこみ、ベッドに寝たきりの老人をロープで降ろす。その同じ人は、嵐のさ中、海上を歩いて舟にたどりつく。また、浜辺で大勢の人々に教えを垂れる。また、幼な子を一人片膝にのせ、他の幼な子たちにぐるりととり囲ませる。また、盲人には見えるようにしてやり、啞には話せるように、聾の人には耳が聞こえるように、病人には健康を、びっこの人には力を、無知なる人には知識をとり戻してやる。また、十字架にかけられ、武装した兵士たちの見守る中で亡くなると、

濃い闇がたれこめ、大地は振動をはじめ、たゞ一つの声が聞こえてくる。「父よ、彼らをおゆるし下さい。なぜなら彼らは何をしているのかわからずにいるのです」(「ルカによる福音書」、23章34節)。

なおもツリーを下り、一段と太くしっかりした枝にやってくると、クリスマスの思い出は濃厚となる。教科書は閉じられ、オヴィディウスやヴェルギリウスは見向きもされない。ひややかで生意気な問題を出す比例算は、とうの昔に打ち捨てられている。テレンティウス(190?-159 B C)やプラウトゥス(254?-184 B C)は、刃物の傷、刻み目、インクだらけの、あの机や椅子をよせ集めてつくった円形劇場で、もはや演じられることはない。クリケットの打棒、ウィケットの柱、そして球は、どこか手の届かぬところにしまわれ、踏み碎かれた草の臭いとかすかな喚声が夕べの風に漂っている。ツリーは相変わらずみずみずしく華やかである。もし私がクリスマスの時節に帰ってこなくなるとしても、世のつづく限り子供たちの姿が絶えることはないであろう(ありがたいことだ!)。そして現にその通り! 神よ祝福を垂れ給え、むこうで彼らは私のツリーの枝に上って楽しく踊りはねており、私の心もまた踊りはねるのだ!

ところで私は、クリスマスにはかならず家に帰ってくる。私たちはみんなそうするし、またそうすべきである。私たちはみんな、あの大きな寄宿学校で短い休暇——長ければ長いほどよい——をとり、身体を休めるために帰省するし、帰省すべきである。何といてもあの学校では、みんな石板の上で算数の問題を永遠に解きつづけているのだから、どこかへ出かけるということになれば、行く意志さえあれば、行けぬところなどありませんか! 行くと決めて行けなかったところがこれまでにあったでしょうか! クリスマスツリーから空想をはじめてゆくならば。

冬景色の中へまっしぐら。ツリーにはそうした景色がたくさんある。霧の低く這う大地を走り、沼地と霧の中を駆け抜け、やがて鬱蒼と茂る造林地がきらめく星屑をほとんど覆い隠し、洞窟のように暗く曲がった長い丘を登っ

てゆく。広々とした高台に出て、これを走って行くうちに、ある並木道のところで馬車をとめる。突然の静寂がまわりを覆う。開き門のベルが凍てつく大気のなかで低い、なかばそら恐ろしい音をたてる。門が蝶番を軸にギーッと開く。そこで私は大きな屋敷に向かって馬車を進める。ちらつく窓の明りがだんだん大きくなり、向かい合って並ぶ木々の列が道をゆずろうとして、両側におごそかに後ずさるかに見える。終日、時おり仰天した野兔が白くなった芝土を勢いよく横切ったり、あるいは遠くのほうで鹿の群れが固い霜を踏み砕く音が、しばし静寂を破る。しだの葉陰で警戒怠らぬその目は、私に見ることができればきっと葉上の水滴のごとくキラキラ光っているにちがいない。だが、彼らは黙して動かない。万物もことごとく静寂を保っている。明りは一段と大きくなり、木々が私の前方では後退し、後方ではまるで退却を禁じるかのようにふたたび道を塞いでゆくうちに、目的の屋敷に着く。

恐らくは焼いたトチの実と、他のおいしい心暖まるものの香が始終漂っている。それというのも、今はクリスマスの火を囲んで冬物話——じつは幽霊のお話、これをしないとあっては面目も立たない——をしているのである。誰一人身じろぎもせず、ただ少しずつ火に身体を近づけるだけである。だが、そんなことはどうでもよい。私はその屋敷に着いたのだ。ここは古い屋敷で、大きな煙突がたくさんあり、薪は炉床の二匹の老犬の上で燃えている。そして陰気な肖像画の数々（いくつかには陰気な伝説がまつわる）が、檜の壁板から不信そうに顔をしかめている。私は中年の貴族で、迎えてくれる主人夫妻およびその客人たち——クリスマスの時節なので、この古い屋敷には人がたくさん来ている——と共にご馳走なくめの夕食をたべ、就寝する。私の部屋はとても古い部屋である。部屋にはつづら織りがかかっている。暖炉の上の緑の騎士の肖像画は好きになれない。天井には黒い大梁が何本か渡してあり、大きな黒いベッドがあり、その足を二人の巨大な黒人が支えている。この黒人、どうやら公園にある古い城館風の教会の二つの墓から出てきたものらしい。しかし、私は迷信深い貴族ではなく、こんなことは気にならない。

さて、召使を下がらせ、ドアに施錠し、部屋着にきかえて火の前に座り、あれこれ思いをめぐらす。ついにベッドに入る。ところがさて、眠れない。転々と寝返りをうち、どうにも眠れない。炉の残り火が発作的に燃えて、部屋をうす気味悪く見せる。上掛けのむこうの二人の黒ん坊と緑の騎士——あの意地悪い顔つきをした騎士——を見ぬわけにはゆかない。ちらつく明りの中で、彼らはこちらへ進んできてはまた退いて行くように思われる。けっして迷信ぶかい貴族ではないのだが、いい気持ちはしない。さて！ 私はそわそわしはじめる——ますますそわそわしてくる。私は言う。「実に馬鹿げたことだ。こんなことに我慢できるものか。仮病をつかって、誰だか知らぬが殴り飛ばしてやる」さて！ 私がまさにそうしようとした時だ。錠を下したドアが開き、死人のように青ざめた、長い金髪をした若い女が入ってくる。この女は火の方角へ迂るように歩いてゆき、先刻私が腰をあげたばかりの椅子に座り、両手を握りしめている。そのとき、女の服が濡れているのに気づく。私の舌は口蓋にくっつき言葉が出ない。けれども私は女を正確に観察する。女の服は濡れている。長い髪には泥水がはねかゝっている。衣裳は二百年むかしのいでたちである。腰帯には錆びた鍵束を吊るしている。さて！ 女はそこに座っている。私は失神することすらできない。心は動転しきっている。やがて女は立ち上がり、錆びた鍵で部屋の錠という錠をすべて開けようとするが、鍵はいずれも合わない。つぎに女は、緑の騎士の肖像画に目を釘づけにし、恐ろしい声で「牡鹿は知っている」と言う。そのあとふたたび両手を握りしめ、ベッドを通りすぎてドアから外へ出てゆく。私は急ぎ部屋着を着るとピストル（旅には常にピストルを携帯している）を二丁掴みあとに続くが、ドアは施錠されている。鍵をまわし、暗闇の廊下を見渡すが、ひと一人いない。あてなく彷徨い出て、召使いを探そうとする。できはしない。夜明けまで廊下を歩きまわったあと、もぬけの部屋に戻って眠り込み、召使い（この男には何物もとりつかぬ）と輝く太陽に起こされる。さて！ 惨めな朝食をとる。人々はみんな私の顔つきが妙だという。朝食後主人と一緒に屋敷を点検し、

つぎに緑の騎士の肖像画のところへ彼をつれてゆく。すると万事がわかった。彼は、かつてこの家族に心を寄せた、美貌で通った若い家政婦を裏切ったのだ。ために女は池に身を投げ、死体はずいぶんたってから発見された。というのも、牡鹿が池の水を飲まなくなったからであった。それ以来、ささやかれてきたところによれば、女は真夜中に屋敷のなかを歩きまわり（だが、とりわけ緑の騎士が眠っていたあの部屋へ行き）錆びた鍵で昔の錠を開けようとするのであった。さて目にした一部始終を主人に語ると彼の顔に一抹の影がさし、誰にも口外しないしてほしいと言う。そんなわけで口外はしていない。しかし、これはすべて事実である。そして、私は死ぬ前に（私は、今では死んでしまっているのであるが）、多くの信頼できる方々に事実だと語った。

反響する廊下があり、陰気な貴賓用寝室があり、多年にわたり閉じきった幽霊窓のある古い屋敷は、数えあげればきりが無い。私は背筋にぞくぞくする快感を覚えながら屋敷の中をぶらつき、たくさんの幽霊に出会うのである。しかし（きっと述べる価値があると思われるが）幽霊とはごく二、三の一般的類型と種類に還元できる。というのは、幽霊にはほとんど独創性というものがなく、人の踏み固めた道を「歩く」のだから。したがって、こんなことがおこる。ある古い屋敷の、ある部屋、そこである非道な領主、男爵、騎士、または紳士が自殺をし、その床の数枚の板についた血がどうしてもとれない。現在の持ち主がしつづけたように、いくらごしごし擦っても、また先代がやったように、ごしごし洗い、曾祖父がやったように、強い酸でくり返し焼いても、血は依然、それ以上赤くもならず色もあせず、広がりも狭まりもせず、以前と少しも変わらない。また、これと似た別の家には幽霊ドアがあって、これが絶対に開かない。別のドアは絶対に閉まらない。あるいは物の化にとりつかれた糸車の音、金槌の音、人の足音、叫び声、ため息、馬のひづめの音、あるいは鎖のガチャガチャなる音がする。また他には、塔に時計があり、これが真夜中に時を十三打つと、家長がまもなく亡くなることを告げる。あるいは一台の、影のように動かぬ黒馬車が、そうした時にはきまって誰かの

目に止まるものだが、廐の庭の大門近くで待っている。あるいはまた、こんなこともおこった。メアリー奥方は、スコットランドの高地にある大きな荒れた屋敷を表敬訪問した。長旅で疲れたので早目に床に就かれ、翌朝、朝食の席でなにも知らずにこう切り出された。「何ておかしなことでしょう。この人里離れたところで、昨夜とても遅い時刻にパーティーが開かれたのに、休む前に私にそのことを何一つ言ってくださらないなんて」そこで誰もがメアリー奥方にどういうことかと尋ねた。すると奥方は答えて「あら、一晚中私の窓の下のテラスを何台もの馬車がぐるぐる走っていたでしょう」と言った。すると屋敷の所有者はまっ青になり、屋敷の奥方もまっ青になった。そしてマクドゥードル領のチャールズ・マクドゥードルはメアリー奥方にそれ以上言わぬようにと身ぶりでも合図したので、誰も彼も口をつぐんだ。朝食後チャールズ・マクドゥードルはメアリー奥方に言った。この屋敷の伝説によれば、テラスの上を駆けめぐる馬車は死の予告だと。それは的中した。二ヶ月後屋敷の奥方が亡くなった。メアリー奥方は宮廷の女官であったので、このお話を老齢のシャーロット王妃にしばしば語った。その証拠に、老王〔ジョージ三世〕はきまって、「えーっ！ 何、何。幽霊、幽霊だって。そんなものはいない。そんなものはいない」と言っていたそうである。そして、就寝するまでそれを言い止めなかったそうである。

あるいは、私たちのたいていが知っている、誰かさんのお友達、その人が若い大学生であった時、彼にはある特別親しい友人がいて、この人と次のような約束を交わしたのであった。それは、精神が肉体を離れた後ふたたび大地に戻ってくるのであつたのである。二人のうち先に死んだ者が生きている者に再度姿をみせることにしよう、というものであつた。時を経てこの約束はその友人の忘れるところとなつた。というのも、二人の若者は年齢も進み、互いに異なる道を歩んで、今では完全にかけ離れてしまつたからであつた。しかしある夜、何年もたってからのことであつたが、その友人が英国北部にきてヨークシャーの荒野で一夜の宿をとり、たまたまベッドから窓外を

見ていた。するとそこに、月明りを浴び、窓辺のダンスにもたれて彼をじっと見つめている、あの昔の学友を見たのであった。言葉をかけると、その亡霊は一種ささやくような、だがはつきり聞き取れる声で、こう答えるのであった。「僕に近づかないでくれ。僕は死んだのだ。僕は約束を果たすためにここに現れたのだ。僕は別世界からやってきたが、その秘密を漏らすわけにはゆかないのだ」言い終わると、からだ全体が一層白くなり、いわば月光に溶け込むように溶け、消えてしまった。

あるいはこの近隣ではことに有名な、かの美しいエリザベス朝時代の屋敷に住む、初代持主の娘がいた。この娘のことは聞いたことがありますね。ないですって！ おやおや、この人はですね、ある夏の夕方たそがれ時、ちょうど十七歳になったばかりの麗しい乙女の時分に、庭の花を摘もうと外に出たのであった。やがて仰天して居間へ駆け込み、父のもとに来てこう言った。「あゝ愛するお父様、私、私自身に出会いましたの！」彼は娘を腕に抱きしめ、思い過ぎだよと言ったが娘は聞き入れなかった。「いいえちがいます。私、広い道で私自身に出会いましたの。それで私まっ青になり、枯れた花を手折り顔をそむけてその花をかざしましたの」その夜彼女は亡くなった。そして、彼女のお話を描いた絵の製作がはじまった。しかし完成を見ることはなかった。それは今日にいたるまで裏がえしに壁にかけ、家のどこかに置かれているという。

あるいは、私の兄嫁の叔父が、ある穏やかな日没どき、馬に乗って家路に向かっているとき、家近くの緑深い小路にさしかかると、せまい道のまん中に一人の男が突っ立っているのが見えた。「あの外套をきた男は、何故あんなところに突っ立っているのだろうか」彼は考えた。「あの男は跳びこえてほしいと思っているのだろうか」しかし、その人物は身じろぎ一つしなかった。じっとして動かないのを見て奇妙に思ったが、叔父は歩みを緩めて馬を進めた。非常に近づきあぶみがまさにその人物に触れんとする時、馬は後ずさりし、その人物は奇妙な、この世のものとは思えぬ仕草で——後向きに、しか

も足を使っているようには見えずに——土手を迂るように登り消えてしまった。私の兄嫁の叔父は「何てことだ。ボンベイから帰ってきた従兄弟のハリーではないか」と叫び、馬に拍車をあてた。馬はとつぜん大汗をだした。叔父はそんな奇妙な行動を不思議に思いながら、もうれつな勢いで突っ走り、ぐるっと家のおもてにまわった。するとそこに、同一人物が、庭に通じる居間の長いフランス窓からちょうど入ってゆくのを見たのであった。手綱を召使いに投げると、それを追って急ぎ部屋に入った。妹が一人きりで座っていた。「アリス、従兄弟のハリーはどこだい」「あなたの従兄弟ハリーのこと、ジョン?」「そう、ボンベイ帰りのね。たった今その小路で会い、今この瞬間ここに入るのを見たんだよ」誰一人ここで人を見かけたことはなかった。あとでわかったのだが、この従兄弟はちょうどこの時刻にインドで亡くなったのであった。

あるいはかの孤児を実際に見たのは、ある分別ある独身老女であった。この人は九十歳で亡くなったが、最後まで身体の諸機能が衰えることはなかった。この話はしばしば誤って語り継がれてきたが、真実を話せばこうである。それというのも、これは実際私の家にまつわる話で、彼女は私の家の親戚筋にあたるからだ。彼女が四十歳の頃で、いまだ並みはずれて美貌の持ち主であった時（恋人が若いみそらで亡くなり、それゆえに多くの申し込みがあったが生涯結婚をしなかった）、ケントのあるところへ滞在に出かけた。その地所は、兄であるインド商人が最近買い取ったばかりであった。ある筋によれば、この地所はかつて年ゆかぬ少年の後見人が保護預かりをしており、その後見人が第二継承者であったので、残忍きわまる扱いをして、年ゆかぬ少年を殺してしまったというのである。彼女はそんなことはまったく知らなかった。話によれば彼女の寝室には檻があり、後見人はこの檻に少年をよく入れていたという。そんなものはなかった。だが、押入が一つあった。彼女は寢床につき、夜中には悲鳴一つあげず、翌朝女中が入ってくると落ちついてこう言った。「一晩中あの押入れから覗いていた、あのかわいい、さびし

「そんな顔つきをした子供は誰なの？」女中は答えるとみるや大声をあげ、すぐさま逃げだした。彼女は驚いた。しかし彼女は、素晴らしい精神力の持主であった。身なりをととのえると下へ降り、兄と二人きりになって話した。

「ねえ、ウォルター」彼女は言った。「私、一晩中かわいらしい、さびしそうな顔つきをした子供に眠りを妨げられどうしだったわ。その子、たえず私の部屋のあの押入の中からじっとこちらを覗いていたの。その押入ね、開けることができないのよ。これ何かいたずら？」

「いや、そうじゃないと思うよ、シャロット」彼は言った。「それはこの家の言伝えなんだ。それが孤児の少年だよ。彼、何かした？」「あの子、ドアをそっと開けたわ」彼女は言った。「そして外を覗いたの。時々一歩二歩と部屋にふみ込んできたわ。そこで私、力づけるためにあの子に呼びかけたの。するとあの子縮みあがって体を震わせ、ふたたび這い込んでドアを閉めてしまったの」「押し入れはね、シャロット」兄は言った。「家のどこにも通じておらず、しっかり釘づけされているんだよ」これは否定すべくもない真実であった。調査のためこれを開けるのに、二人の大工が午前中かかりきりになった。そんなわけで、彼女は自分が孤児の少年をしかと目にしたことに満足であった。しかし、この話の途方もなく恐ろしいところは、年若くして亡くなった兄の三人の息子もまた、この少年をつぎつぎに見たことである。息子がめいめい病に伏した時、十二時間前に熱にかかって帰宅しこう言った。

「あゝママ、僕はある牧場のかくかくしかじかの樫の木の下で見知らぬ男の子と遊んでいたんだよ——かわいくて、さびしそうな顔つきをした男の子だよ。とても臆病で、いろんな仕草をするんだよ」息子をなくした経験から、両親はこれが孤児の少年であり、そして、この少年を遊び相手にした子供は間違いなく命脈尽きることを知ったのである。

ドイツのお城はたくさんあり、私はそこでたゞ一人、寝ずの番をしながら亡霊が出てくるのを待つ。私むけに比較的楽しい雰囲気にしつらえた一つの部屋に通される——パチパチ音をたてて燃える火が、白壁に投ずるさまざま

な影を私は見渡す——村の宿の主人と美しい娘が、炉に新しい薪束をくべ、夕餉のごちそうに冷えた焼き鳥、パン、ブドウ、それに、ひと瓶のライン産ぶどう酒を小テーブルに並べて引き下がってしまうと、とても寂しく感じる——彼らが引き下がる時、ドアというドアが、まるで同じ数のむつつり屋の雷の音にも似て、次から次へと大音響をたてて閉じる——さらにまた、丑三つ時には様々な超自然の神秘を見聞きする。ドイツの亡霊学生もたくさんいる。この人たちの仲間に入り、私は火に一層身体を近づけてゆくのであるが、片隅のあの小学生は目をまん丸に見開き、椅子がわりにしていた足台から飛びのく。それというのも、ちょうどそのとき偶然ドアが風に吹かれて開いたからだ。クリスマスツリーに光る、こうした空想の果実はじつに豊かに実っている。ほとんど頂のあたりにも花が咲き、枝という枝には実がたわわに熟している。

そこに吊り下がる、もっと年いってからのさまざまな玩具や空想——しばしば味気なく、さほど純粹ではない——の中であって、あのなつかしい昔の聖歌隊、夕べの和やかな音楽とかつて結びついたいろいろな想いは、いつまでも変わることはありませんように！ 私の子供時代の慈悲深いお方は、クリスマスの時節のさまざまな社会慈善の考えにとり囲まれて、いつまでも変わらぬ姿で立ちつくして下さいように！ この季節がもたらすあらゆる楽しい想いと想像の中であって、貧しき者の屋根の上にとまって動かぬ明るい星は、なべてキリスト教世界の星であって下さいますように！ あ、消えゆくツリーよ、しばし待て！ 私にはいまだ、ずっと下方の枝が暗くて見えないのだ。もう一度この私にながめさせて下さい！ 汝の枝には飾りのない場所があるのがわかっている。そこには私が愛した二つの目が輝き微笑んでいたのだ。だがその二つの目も今はそこを去った。しかしずっと上方に、その亡くなった少女を、そしてあの未亡人の息子を蘇えらせるお方が見える。あ、神は善良なるかな！ もし「老齡」が、汝のずっと下方の茂みの見えぬ部分に潜んで私を待ち受けているのであれば、願わくはその人物に対し、こ

の白髪まじりの私に純粋な子供の心、そして子供のもつ心服と信頼とを示させてください！

いまヤツリーは明るいさざめき、歌、踊り、陽気さで飾りたてられている。それはすべて大歓迎である。クリスマスツリーの枝の下にあっては、こうしたものはとこしえに無心であり、歓迎されるものであってほしい！ 陰鬱な影を投げることはないのだから。しかし、それが大地に沈んでゆくにつれて、あるささやきが葉から葉へ伝わって行くのが私には聞こえる。「これは愛とやさしさ、慈悲と同情をおしえるために。これは、私を記念するために！」
 (「ルカによる福音書」22章19節)

訳注

- 1 クリスマスツリーは、1841年アルバート公によりウィンザー城に飾られて以来、広く英国に受け入れられるようになる。
- 2 架空の饗宴。バルマク家の王子がシャカーリフという名の乞食に対して、テーブルに空の皿を並べ、架空の珍味を手振り身振りで食べさせたことからこの名がある。「床屋の第六の兄シャカーリフの物語」『千一夜物語』（佐藤正彰訳、全四巻。筑摩書房、昭和58年）、I参照。邦訳では「さるおかた」と記しているが、Burton 訳、Lane 訳、及びその他の英訳本では、“the Barmaki, the Bermecide, one of the Barmakees”のように、バルマク家の固有名詞が用いられている。
- 3 “A was an apple pie” および “A was an archer” については I. & P. Opie, *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes* (Oxford, 1977), pp. 47–50 に詳しい。また他に “A was an Acorn, that grew on the oak” (Rusher’s *English Spelling Primer*, c. 1800), “A was ‘an Ass” (*The Galloping Guide to the ABC*, c. 1830), “A was an Angler” (*The Picture Alphabet*, 1830), “A was an Arch Boy” (Catnach’s *The Golden Pipin*) などがある。
- 4 以下に出る “Jack and the Giant Killer”, “The Red Riding Hood”, “The Yellow Dwarf” は、Iona & Peter Opie, *The Classic Fairy Tales* (Oxford University Press, 1974) に収められている。
- 5 【Valentine and Orson】熊に育てられた Orson と、王宮で育てられた Valentine の双子は、成長してのち力を合わせ、父母の治める国を悪人より奪還し、これを治める。

Mother Bunch は、若い乙女に良夫さがしの、迷信に似た処方数を数々与えた女性

である(“The History of Mother Bunch of the West”). John Ashton, *Chapbooks of the Eighteenth Century* (Chatto & Windus, 1882), pp. 109–23; 84–7 を参照。

6 “Ali Khwajar and the Merchant of Bagdad” in Richard F. Burton, *Supplemental Nights to the Book of the Thousand Nights and a Night*, III (Benares: The Kamashastra Society, 1887), pp. 405–410. なお邦訳には入っていない。

7 【Philip Quarll】フィリップ・カールは三度の不幸な結婚のあと、国外追放の身となり South Sea に送られるが、途中嵐にあつて難破し、ただ一人生き残つて孤島でくらす。ジャングルの中で農耕と家畜飼育の経済をうちたて、忠実な下僕である猿(Beaufidelle)とともに暮らす。Peter Longueville, *The Hermit: Or, the Unparalled Sufferings and Surprising Adventures of Mr. Philip Quarll, an Englishman* (1727; rpt. NY: Garland Publishing Inc., 1972)

【Sandford and Merton】正直で常に明るい農夫の息子 Harry Sandford は、Barlow 師に預けられた、無学で短気な富豪の息子である Tommy Merton を、様々な経験や師の感化を通して、しっかりした人間に作り上げ、深い友情をめばえさせる。Thomas Day, *The History of Sandford and Merton* (1783–9; rpt. London: Brown & Co., [n. d.])

8 各々の芝居の題名、作者名、および所収は、以下の通りである。

William Barrymore, “The Dog of Montargis,” *British Drama Illustrated*, vol. 5/
George Lillo, “George Barnwell,” *Bell’s British Theatre*, Series I, vol. 5/Nicholas
Rowe, “Jane Shore,” *Bell’s British Theatre*, Series I, vol. 1

9 ハーレキンが色とりどりのつぎはぎを施した絹服に、ピカピカ光る金属片(48,000枚、重さ3ポンド)を飾りつけ、ところ狭しと跳ね回ったのは、自らその衣裳を考案した James Byrne が *Herlequin Amulet; or, The Magic of Mona* においてハーレキン役をこなし、大成功をおさめたのが最初である(Drury Lane, 1800)。また、真っ赤に焼けた火かき棒を用いるのは、Grimaldi のお家芸の一つである。

10 人形劇の舞台装置, “The Miller and His Men” 及び “The Exile” の上演については、A. E. Wilson, *Penny Plain Two Pence Coloured: A History of Juvenile Drama* (London: Harrap & Co., 1932) に詳しい。

【The Miller and His man】何も知らぬ小作人 Kelmer は、正直者の粉屋を装う盗賊の首領 Grindoff に娘を嫁がせようとする。しかし娘には恋人がいて父の要求を承知しない。盗賊は闇にまぎれて娘をさらい隠れ家に連れて行くが、変装して賊の一味に加わった恋人の Lothair が危機一髪彼女を助け出し、逃走におよんで火薬庫にしかけた導火線に点火する。盗賊一味は風車小屋もろともこっぴ微塵に吹き飛ばす。Isaac Pocock, “The Miller and His Men” in Michael Booth, *Hiss the Villain* (London: Eyre and Spottiswoode, 1964), pp. 43–86.

【Elizabeth】Ulrick 公は政敵により地位、財産および自由を奪われ、12年の長きにわたりシベリアに流刑の身となっている。父の嘆きの中で育った娘の Alexena は、女帝への嘆願を胸に、老僕と共に長途の旅に出る。追手に阻まれ、大自然の危険に身をさらしながらも、別人に身をやつした青年に助けられて彼女はモスクワにたどりつき、即位したばかりの女帝 Elizabeth に父の無罪を訴え、彼を救出する。Frederick Reynolds, "The Exile" in *Cumberland's British Theatre*, vol. 29. 脚本のもととなった Sophie Cottin の小冊子は "Elizabeth, or the Exiles of Siberia" である。